（第三種郵便物認可）H24.6.27. 中国新聞

くらし 医療・健康

子宮内膜症 早期受診を

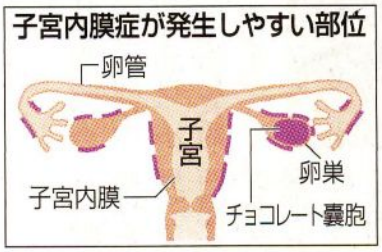
産婦人科医ら啓発会議設立

重い月経痛を引き起こし、不妊やがんにもつながる子宮内膜症についての知識を広め、女性たちの早期受診を促そうと、全国の産婦人科医ら60人余りが「日本子宮内膜症啓発会議」を設立した。今後3年間で、子宮内膜症や月経痛による産婦人科受診者を現在の年間100万人から200万人に倍増させることを目標に活動する。

子宮内膜症は、本来は子宮の内側にしかない子宮内膜が子宮以外の場所で増殖する病気。通常、子宮内膜は不要になると月経血として体の外に排出される。ところが、子宮の外で増殖した内膜組織は体内にとどまり、炎症を起こして激しい痛みを生じさせる。

日本子宮内膜症啓発会議の設立について記者会見する実行委員長の百枝・聖路加国際病院女性総合診療部長㊧ら

発生しやすいのは卵巣や子宮外膜、卵管、直腸などだが、肺やへそにできることもある。卵巣内に発生した場合は古い血液が袋の中にたまる「チョコレート嚢胞（のうほう）」が形成され、放置するとがん化の恐れがあるという。



「子宮内膜症は月経がある女性の約10％に存在し、痛みによって女性のQOL（生活の質）を著しく阻害する。また、患者の30～50％が不妊症といわれる」と、同会議実行委員長の百枝幹雄・聖路加国際病院女性総合診療部長は解説する。

発症の詳しい原因は不明だが、リスクは月経の回数が多いほど高まる。初潮が早まり、出産回数が減った現代女性は、生涯の月経回数が昔の女性に比べて9倍の約450回にも及び、患者は増加傾向にあるという。

「多くの女性が月経痛や子宮内膜症を放置している。早く産婦人科を受診し、適切な治療を始めてほしい」と百枝さん。

同会議は今後、女性だけでなく、無理解に陥りがちな男性に向けても情報を発信し、女性が産婦人科に行きやすい環境づくりを目指す。